

紀 要

第 6 号

目 次

粟津湖底遺跡出土の木質遺物	(伊東隆夫)
弥生時代の木偶と祭祀 —中主町湯ノ部遺跡出土木偶から—	(濱 修)
県内における磨製石斧の消滅年代について	(井上洋介)
土師器甕の変遷とその背景 —近江型土師器成立への諸段階—	(大崎哲人)
草津市笠山古窯出土遺物の紹介	
—笠山古窯の位置づけをめぐって・瀬田丘陵生産遺跡群の検討—	
	(畑中英二)
倭京の実像 —飛鳥地域における京の成立過程—	(相原嘉之)
近江八幡市大手前・御所内遺跡出土の銅印をめぐって	(田路正幸)
将棋史研究ノート(3) —王将と玉将—	(三宅 弘)
近江国坂田荘の開発(中) —長浜市大東遺跡を中心として—	(北村圭弘)
滋賀県八日市・永源寺地域における蔵王産花崗岩製中世石造美術の分布	
—八日市市・永源寺町石造美術石材分布調査概要—	(兼康保明)
滋賀県出土の埴輪資料集(その3)	(稲垣正宏)

1993. 3

財団法人 滋賀県文化財保護協会

倭京の実像

— 飛鳥地域における京の成立過程 —

相原 嘉之

1. はじめに

天武天皇5年「新城に都をつくらむとす」(天武紀5年)。これは天武天皇が藤原地域において条坊制都城「新城(藤原京)」を計画した最初の文献史料である。しかし、日本書紀によると条坊制を伴う「藤原京」成立以前の飛鳥において「倭京」と称する都が存在していたことが⁽¹⁾記されており、その範囲は「京内24寺」(天武紀9年)からも伺うことができるように、広大な地域が想定されている。現在では「倭京」と称する都の存在やその範囲については定説となりつつあるのが現状である。しかし、これまで「倭京」の復元基準となっている点については疑問な点も多い。倭京の範囲・構造・成立過程そして新益京との関連など未だ未解明な点も多く問題である。そこで今回は特に遺跡を中心に飛鳥地域における開発の動向から読みとることのできる「都市的空間」⁽²⁾の成立過程について分析し、これらの諸問題について検討を行うこととする。

2. 研究史とその問題点

「倭京」に関する研究史をみると、まず岸俊男氏の研究があげられる。以下に岸氏の研究をはじめ数人の研究の概略について記し、そこに存在する問題点の提示を行い次章の考察に向けた。

岸俊男氏は昭和45年「飛鳥と方格地割」⁽³⁾なる論考において倭京について考察をおこなっている。この中で飛鳥地方において方格地割を復元しており、同時に「飛鳥」の範囲を文献を基に小治田・豊浦・橘・島を含まない香久山南麓の大官大寺跡付近から南、橘寺から島之庄・岡の集落以北に比定している。そして、倭京についてはすくなくとも天武朝以降には1つの行政区画としての「京」が存在したとし、その範囲については壬申の乱の戦闘記事や天武紀9年の「京内24寺」の記事から飛鳥の範囲を越えて北は横大路以南、西は下ツ道以東、東は上ツ道以西、南は桧前寺・坂田寺地域までを推定している。また、古墳やヒブリ山・皇子の宮⁽⁴⁾の分布からも同様の結果を導いている。

次に研究史上に現れるのは秋山日出雄氏の「藤原京と飛鳥京の京城考」⁽⁵⁾とその後、より詳細に論述した「飛鳥京」⁽⁶⁾である。秋山氏はその論考の中で大藤原京との関係において飛鳥京の範囲と創設年代・性格について記している。範囲については岸氏同様に「京内24寺」の記事と歴史地理学から横大路・下ツ道・上ツ道・川原橘古道に囲まれた東西8里・南北9里と推定している。また、この範囲を外城、「飛鳥」の範囲を内城と理解する2重構造を持つとする。この飛鳥京の創設年代については、古道の設置時期(推古21年紀)との関係に求めているが、用明陵・推古陵の改

葬の記事などから一時期になされたのではなく、内城から外城へと拡大されたものとみている。

つづいて木下正史氏は「藤原宮域の開発」⁽⁷⁾の中で藤原地域における7世紀の開発状況の動向から、7世紀後半にひとつの開発の画期をみつけている。また、藤原宮先行遺構群についても詳論しており、宮域になるにもかかわらず条坊道路・建物群が建てられること、この建物群が一般集落とはみなしがたいことから、宮内先行条坊およびこれに伴う建物群を倭京に関連づけようとしている。

昭和60年には前田晴人氏が「倭京の実態についての一試論」⁽⁸⁾において飛鳥と境界祭祀の検討から倭京の構造・範囲について言及している。そのポイントとしては軽市と海石榴市の巷を西南と東北の隅と想定しており、古道に囲まれた範囲を倭京とみている。特に、推古朝には海石榴市で裴世清を迎えるなど都の玄関としての役割を持つと考えられ、京の設立年代は市の設置などから推古朝まで遡るとする。

以上4人の研究者の説を⁽⁹⁾概述してきたが、倭京の範囲・構造については主に「京内24寺」の記事と海石榴市を拠り所にして横大路・下ツ道・上ツ道に囲まれた広大な範囲を想定している。また成立時期については斉明・天武朝の7世紀後半には成立しており、さらに遡った推古朝に求めることも可能とする。しかし、ここで倭京の推定根拠となっている事象については問題が多いと考える。まず、「京内24寺」であるが次章で考察するように現状での遺跡の分布からは、上述のような広大な地域は想定し得ない。また『続日本紀』養老4年(720)に「都下四八寺」という記事があるが、奈良時代初頭の平城京において48寺院を想定することはできず、この場合平城京とその周辺の意味と理解する必要があることから、倭京内に24寺院を設定する必要はない。次に海石榴市と古道の設置年代から倭京の成立時期を推古朝まで遡らせて考えているが海石榴市は文献史料からは推古朝までしか文献に現われず、むしろ磯城・磐余の6世紀代の宮との関係で考えるべきである。そして、古道の設置もしくは整備の年代についてもこれまでよりやや新しくする必要があると考える。このようにこれまでの倭京の復元案およびその根拠についてはやや問題があるようである。では倭京を一体どのように理解すればよいのであろうか。そこで本稿では「飛鳥地域における京の成立過程」の副題のもとに、飛鳥周辺地域の遺跡⁽¹⁰⁾(集落・寺院・墳墓・土器)の時期別な推移を追いかけることによって都の範囲・構造・成立過程を明確にし、倭京の実態にせまりたい。また、倭京と新益京(藤原京)との関係についても言及することにする。なお、新益京の造営と京城については別に私見を持っている。別稿にて⁽¹¹⁾論述したい。

3. 京の成立過程

a. 時期区分について

本稿での考察方法はすでに記してきた。そこでまず、個々の遺跡における時間設定(時期区分)を行う必要がある。時期区分の設定方法としては土器・瓦等があげられるが、瓦は寺院および藤原宮以降の宮殿でしか出土しないのに対して、土器は寺院・宮殿および集落等の遺跡から普遍的に出土する。このため今回の時期区分の設定方法としては、土器を基準にし一部については瓦・文献史料を使用して行うこととする。

飛鳥・藤原地域における7世紀の土器については、すでに西弘海氏によって5期に編年⁽¹²⁾されている。その後、資料の蓄積はあるものの基本的に西氏の編年案が今日まで踏襲されている。その内容は土師器・須恵器の杯類を中心に形式・器種構成等により飛鳥Ⅰから飛鳥Ⅴにわけそれぞれ7世紀第Ⅰ四半期から第Ⅳ四半期に、飛鳥Ⅴは7世紀末から8世紀初頭の藤原宮期の年代を与えている。近年に至って発掘調査から重要な資料の発見などがあり、その年代観については若干の修正⁽¹³⁾が行われている。ここでは今回の時期区分と密接に関係するため飛鳥・藤原地域の土器の年代観についてやや詳しくみてみよう。

まず、7世紀の土器の前段階に位置する土器（飛鳥寺下層式）が飛鳥寺の調査で出土している。これは飛鳥寺造営以前の包含層から出土したもので宇治市隼上り窯・枚方市楠葉窯の調査等の関係から飛鳥寺造営以前の6世紀末に近い年代が与えられている。飛鳥Ⅰは小墾田宮推定地SD50を基準資料とし他に川原寺下層SD02・山田寺下層SD619および整地層から出土している。このうち山田寺下層資料は文献から641年の山田寺造営を下り得ないことから飛鳥Ⅰの下限を示す資料となる。飛鳥Ⅱは坂田寺SG100を基準資料とし他に水落遺跡の石組溝・木樋直上から飛鳥Ⅱの最新の土器が出土している。水落遺跡は中大兄皇子によって660年に建てられた漏刻と推定されている。遺構の切合いから天武朝の柱穴より古いことは確認されているが、正確な廃絶時期を示す資料はない。しかし、文献によると大津京遷都の667年から大津京に漏刻を置いたという671年の間と理解できる。現在の資料ではこの頃に飛鳥Ⅱの下限をおさえることができる。飛鳥Ⅲは石神遺跡SE800を基準資料とし他に藤原宮下層SE2355・SK1366・大官大寺下層SE116・SK121から出土している。また、大津京に関係するとみられている穴太瓦窯⁽¹⁴⁾からもこの時期の土器が出土している。飛鳥Ⅳは雷丘東方遺跡SD110を基準資料とし他に上ノ井手遺跡SD105・藤原宮大極殿下層SD1901Aから出土している。飛鳥Ⅳの下限については藤原京遷都694年に位置づけられている。また、藤原宮大極殿下層SD1901Aからは天武11・13年の紀年銘のある木簡が出土している。飛鳥Ⅴは藤原宮東内濠SD2300・東外濠SD170・内裏東大溝SD105から出土している。この時期の遺物は宮内・京内から多数出土しており藤原宮期の年代が与えられている。

飛鳥・藤原地域における土器の編年観・年代観について現在の見解は以上のようなものである。しかし、この編年の実年代については若干の問題点も含まれている。ここでその問題点を提示しさらに詳しく実年代を検討したい。

まず問題になるのは飛鳥Ⅰの下限である。山田寺資料⁽¹⁵⁾から飛鳥Ⅰの下限を山田寺造営の641年以前としている。しかし、飛鳥Ⅱである坂田寺SG100⁽¹⁶⁾からの共伴遺物に山田寺式の瓦が含まれていないことから、飛鳥Ⅱは山田寺造営の641年以前には存在していたこととなる。ただしこの点から飛鳥Ⅱの正確な上限を定めるのはむずかしい。一方、飛鳥Ⅱの下限について水落遺跡の廃絶年代から新しくみた場合667～671年頃の年代が与えられているが、水落遺跡の造営は石神遺跡と密接な関係を持っており、飛鳥Ⅱの下限を上記のようにみると飛鳥Ⅲは天智朝に限定されることになる。石神遺跡のA期は斉明朝と考えられており、SE800⁽¹⁷⁾からは飛鳥Ⅲの土器が出土していること、後に詳述するような藤原地域における飛鳥Ⅲの土器の出土状況を考えると、飛鳥Ⅲを天智朝のみに限定することはできない。

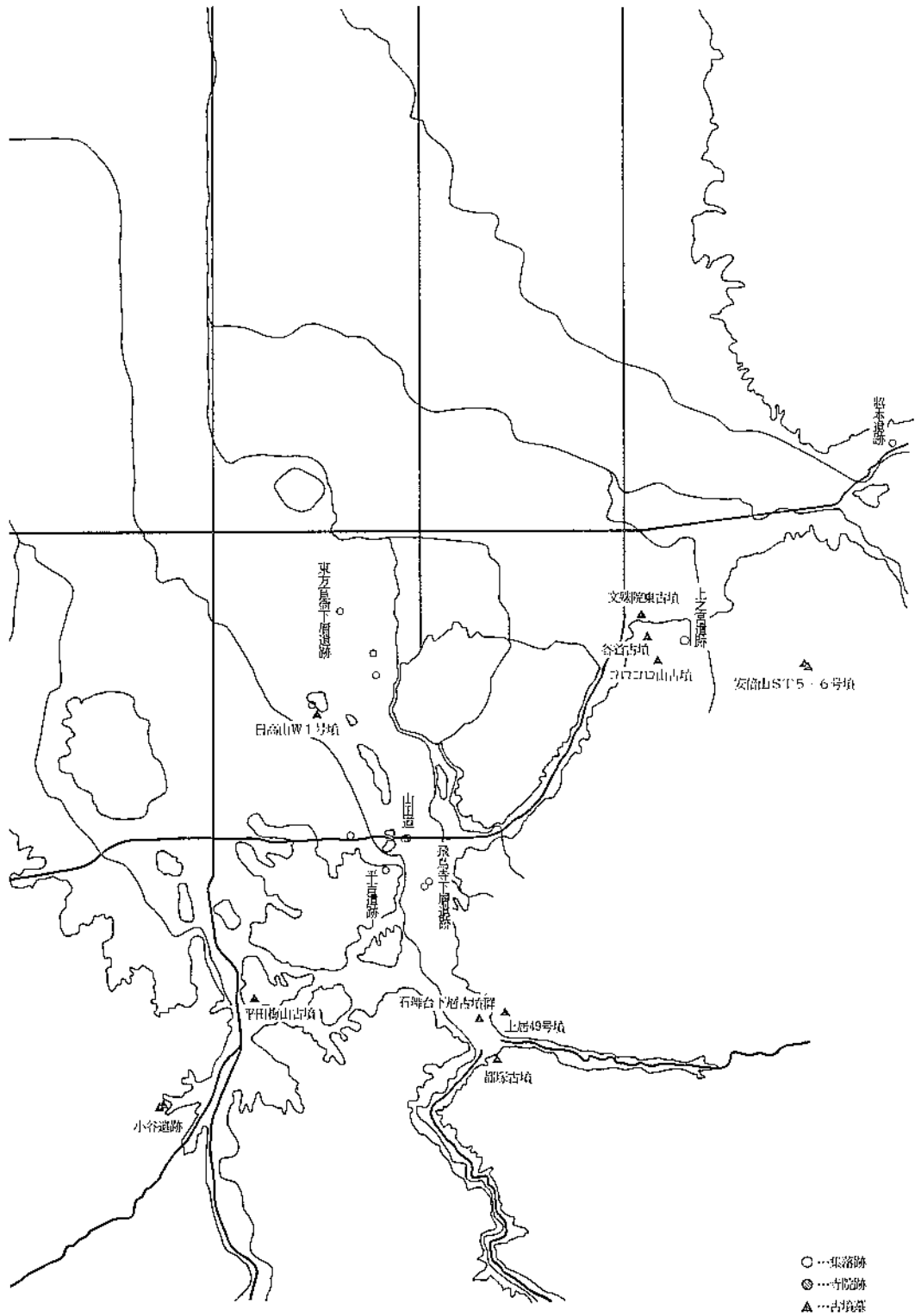
これらのことをまとめて今回は6世紀後半を1期と7世紀を5期の計6期に時期区分を行う。まず第0期として6世紀後半から末（飛鳥寺下層式）までとし、敏達～崇峻天皇の時期に比定、第1期は飛鳥Ⅰで推古天皇の時期、第2期は飛鳥Ⅱで舒明～孝徳天皇の時期、第3期は飛鳥Ⅲで斉明～天智天皇の時期、第4期は飛鳥Ⅳで天武～持統（藤原遷都まで）の時期、第5期は飛鳥Ⅴで藤原宮期の時期に区分して以下の時期区分に使用する。

b、飛鳥地域の集落

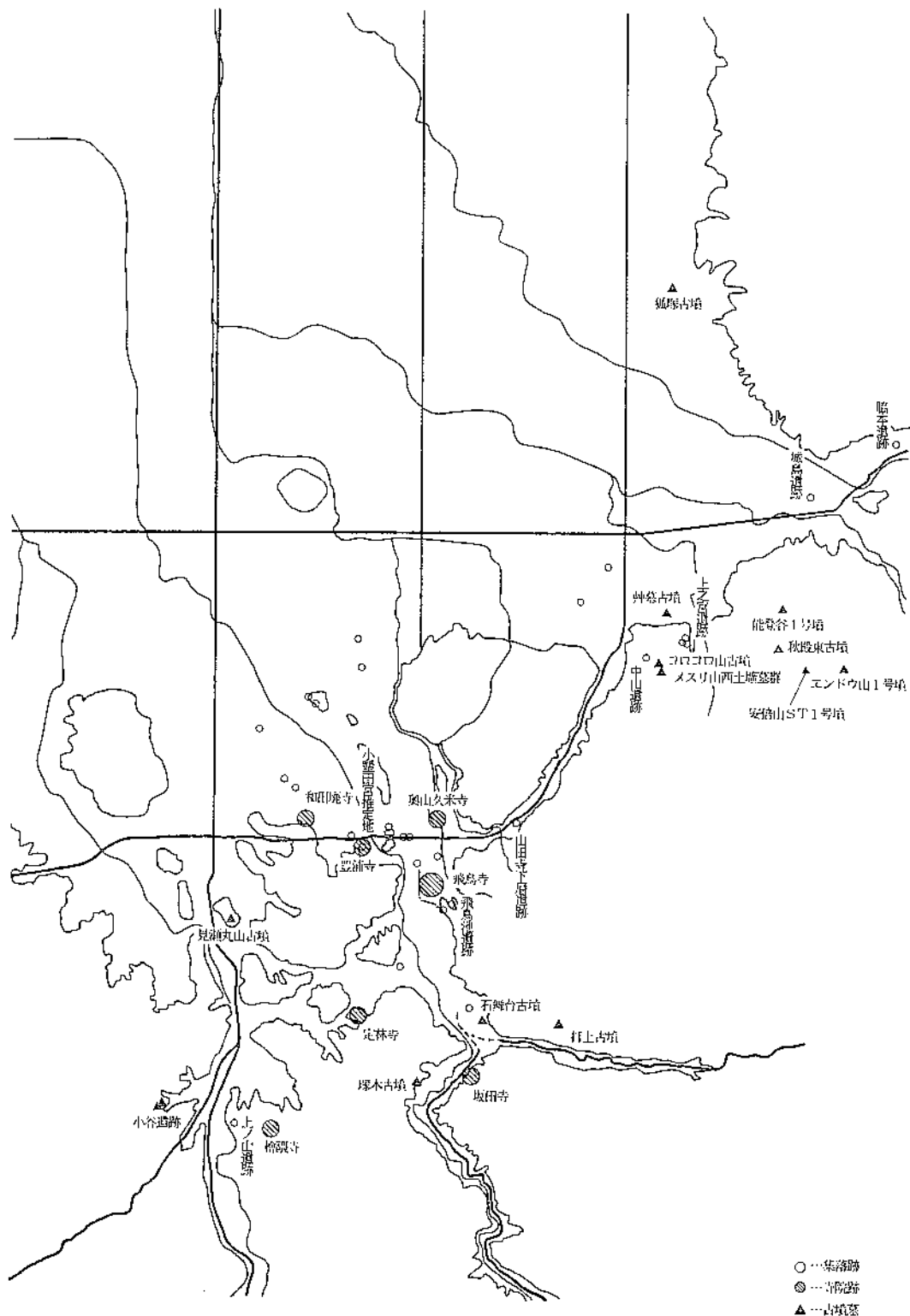
まず飛鳥地域周辺の集落の動向についてみてみたい。集落分布をみることは、この地域の開発状況の推移を探ることにもなる。ここでは時期の判明する遺構の分布から分布図⁽¹⁸⁾を作成した。

第0期における集落の分布をみると磐余・阿部・飛鳥・藤原宮域の4地域に分けることができる。磐余地域では初瀬谷の入口部分に存在する脇本遺跡⁽¹⁹⁾が確認されている。この磯城・磐余地域は飛鳥へ都が遷る前の諸宮が置かれていた所と考えられており、その関連が注目される地域である。この脇本遺跡（Ⅱ期）では西に庇を持つ建物・総柱建物・石垣状遺構などがみつかり、これらの遺構の軸は西に振れている。阿部地域では阿部丘陵上に位置する上之宮遺跡⁽²⁰⁾がある。上之宮遺跡は聖徳太子の幼年期に住んでいたと考えられている場所で、この時期（2・3期）の遺構としては総柱建族群あるいは四面庇建物・特殊な園池遺構からなる邸宅遺構がみつき、方位は東に振れている。飛鳥地域では飛鳥寺下層・平吉遺跡・山田道・小墾田宮推定地で確認されている。このうち飛鳥寺下層⁽²¹⁾と平吉遺跡⁽²²⁾では竪穴住居が検出されており磐余・阿部地域の掘立建族群との対比で注目されよう。また、山田道の調査⁽²³⁾では明確な生活痕跡はないものの、大量の土器が出土していることから集落の中心は飛鳥寺周辺とみることができる。藤原宮域では4ヵ所確認されているが、これらは東方官衙下層を除いては土坑・溝で明確な生活痕跡とはいえない。東方官衙下層遺跡⁽²⁴⁾は約45度東に振れる遺構群で柵列の内に整然と建族群が並ぶものである。現在、古代豪族居館の一例としてとりあげられている。この遺構はこの時期だけで第1期までは続かない。

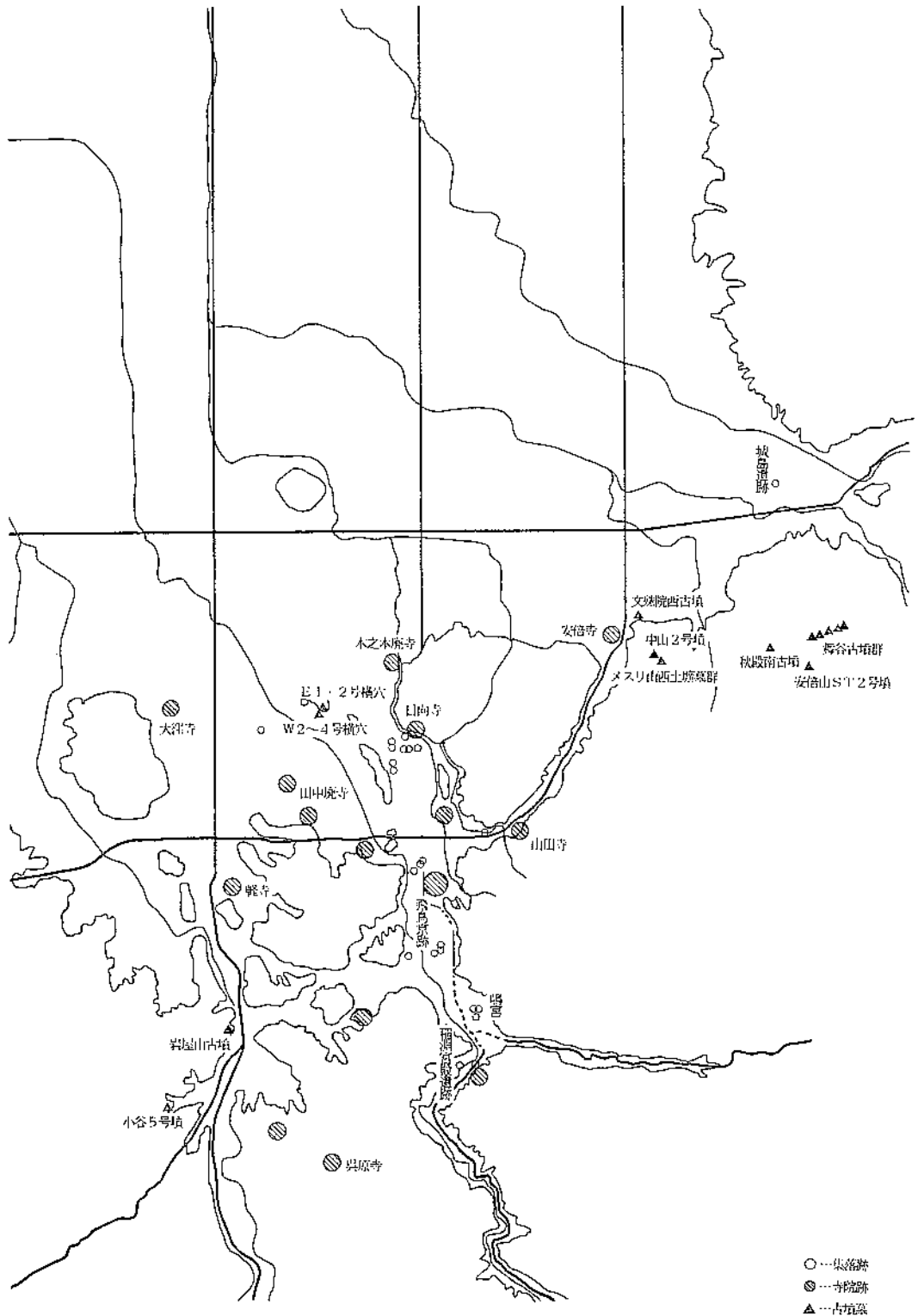
続く第1期の集落も第0期同様に磐余・阿部・飛鳥・藤原地域の4地域に分布する。しかし、第0期と比べると阿部・藤原地域の分布範囲が広がっていることがわかる。磐余地域では脇本遺跡が引続き存続し、新たに城島遺跡⁽²⁵⁾アベヲ地区で竪穴住居が確認されている。阿部地域では前段階からの上之宮遺跡の他に中山遺跡・阿部六ノ坪遺跡・阿部寺遺跡サシクベ地区がみつかり、上之宮遺跡（4期）は第0期に検出した四面庇建物を建替えたもので、この遺跡内で最も整備された時期のものである。中山遺跡⁽²⁶⁾の大型掘立柱建物は丘陵上に位置しほぼ軸を東西にとる。その立地・規模および構造から山荘風の邸宅が想定される。阿部六ノ坪遺跡・安部寺遺跡では溝・土坑のみの検出である。飛鳥地域では小墾田宮推定地・豊浦寺下層・山田道・石神遺跡・飛鳥寺周辺・飛鳥池遺跡・山田寺下層および川原寺下層とやや南にうつって上ノ山遺跡がある。山田寺下層遺跡⁽²⁷⁾は山田寺の造営前の遺構で蘇我倉山田石川麻呂の邸宅と推定されるものである。また、飛鳥池遺跡⁽²⁸⁾はこの段階の後半にすでに金属関係の工房が存在していたと考えられる。一方、南方に位置する上ノ山遺跡⁽²⁹⁾では総柱建物や土壘状遺構等が検出されており、その立



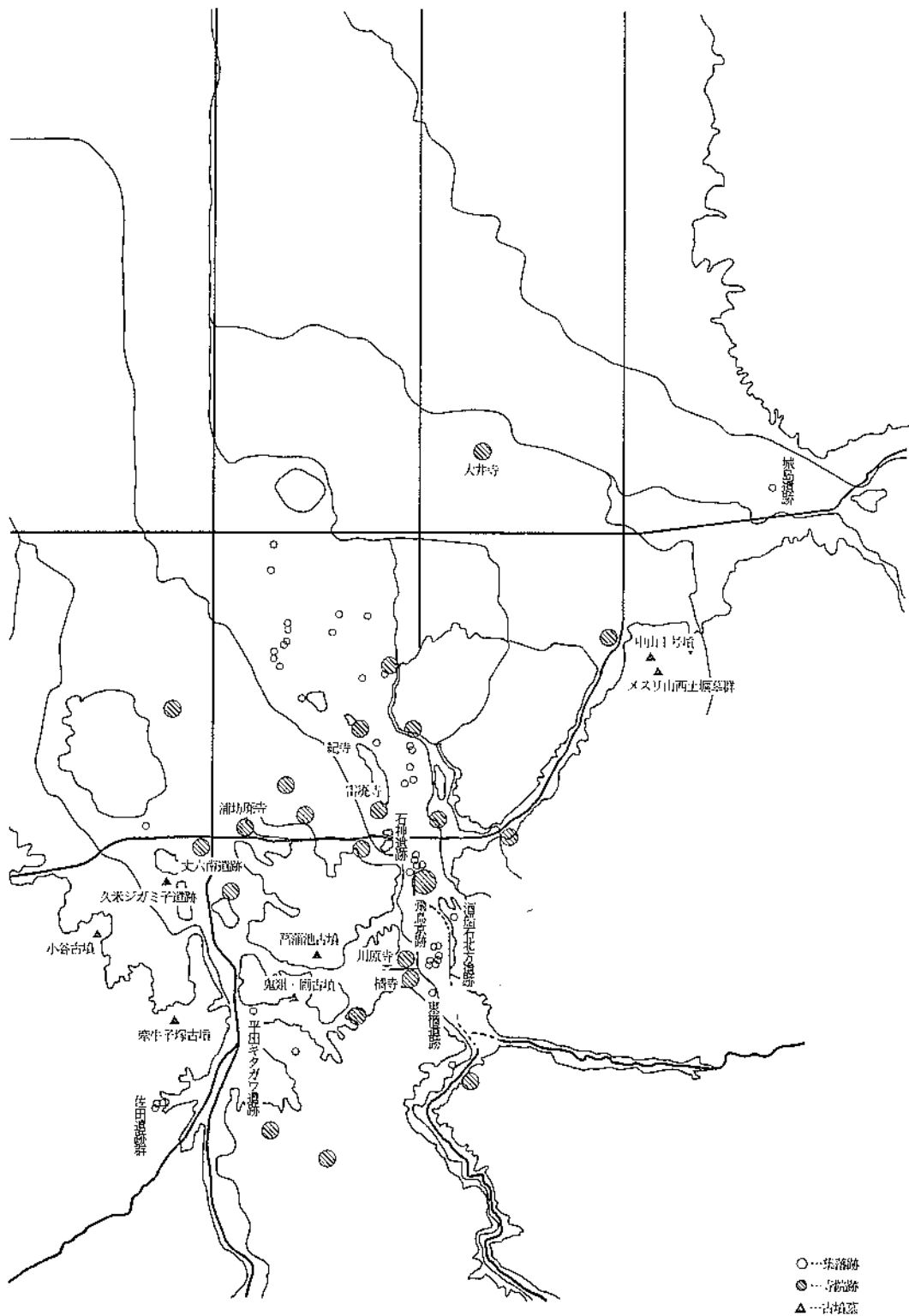
第1図 遺跡分布図 (第0期)



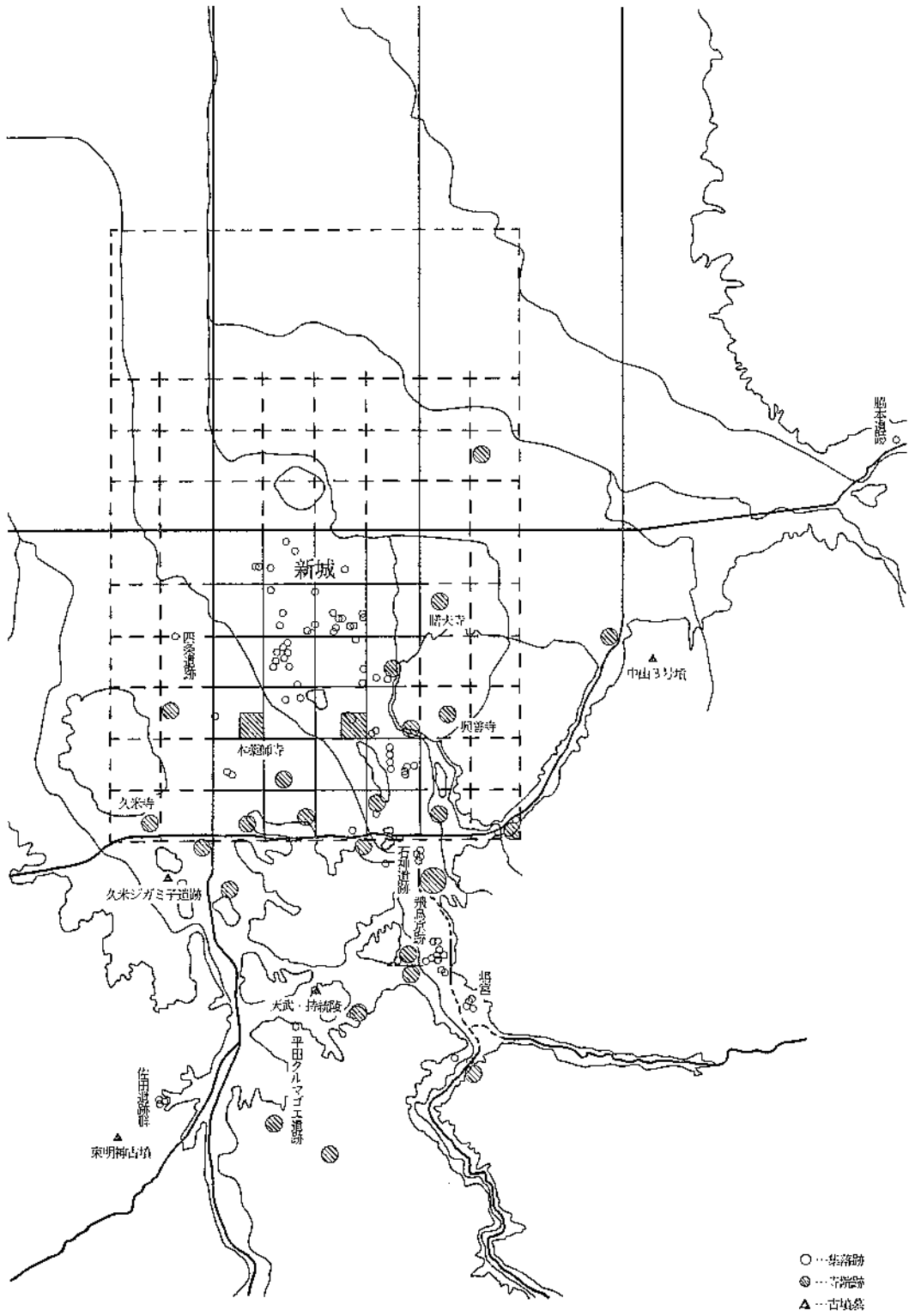
第2図 遺跡分布図(第1期)



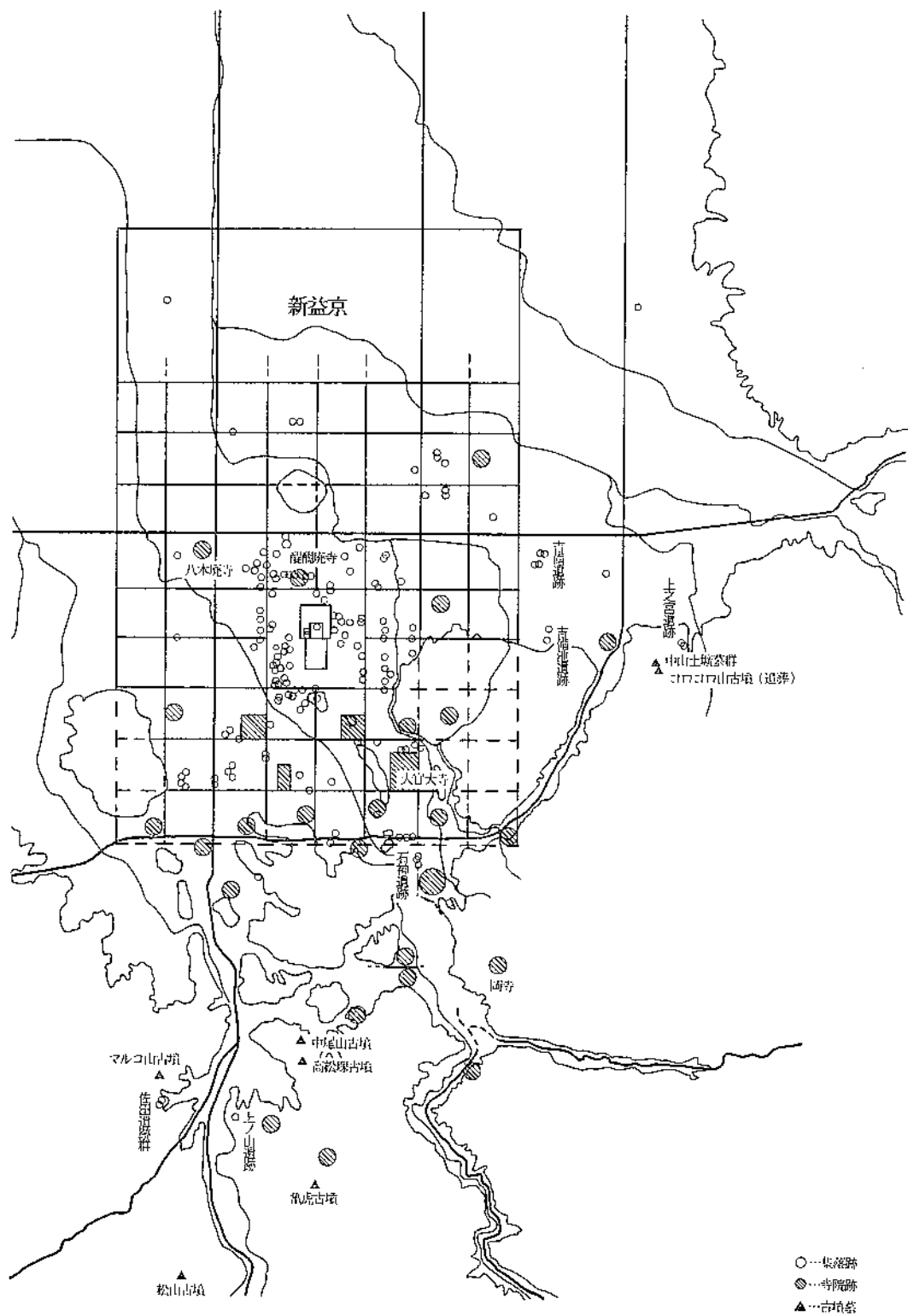
第3図 遺跡分布図(第2期)



第4図 遺跡分布図(第3期)



第5図 遺跡分布図（第4期）



第6図 遺跡分布図(第5期)

地が下ツ道に沿うことから古道との関係が注目され、飛鳥の外郭施設としての性格が予測される。藤原地域では第0期よりその分布範囲が広がっているが、検出遺構は溝・土坑等のみで明確な生活痕跡とは言いがたい。ただし、日高山⁽³⁰⁾から木之本廃寺と同型式の型押忍冬文軒瓦が出土しており、瓦窯・工房⁽³¹⁾を推定することもできよう。

第2期の集落は磐余・飛鳥・藤原地域の3地域に分布し、阿部地域には現在のところ確認されていない。磐余地域でも城島遺跡田中地区のみで他にはない。この城島遺跡⁽³²⁾では方位を東に振る建物群がみつかっており、邸宅跡と考えられている。飛鳥地域では飛鳥京跡の最下層で西に振る遺構群が断片的に確認されている。小澤毅氏によると飛鳥岡本宮⁽³³⁾と推定している。また、嶋宮では庭園遺構⁽³⁹⁾がみつかっており、その南方では河辺の行宮と推定されている稲淵宮殿遺跡⁽³⁵⁾がある。藤原地域に目を向けると大官大寺周辺で大規模な整地⁽³⁶⁾とこれに伴う遺構が注目される。

第3期になると磐余・飛鳥・藤原の3地域に分布する。この段階では分布の中心は飛鳥・藤原地域である。特に藤原地域では前段階よりも範囲が広がる。磐余地域には前段階からの城島遺跡田中地区のみしか確認できていない。飛鳥地域には後岡本宮の有力な候補地⁽³⁷⁾である飛鳥京跡上層内郭⁽³⁸⁾を中心として北に石神遺跡(A期)、東に酒船石北方遺跡⁽³⁹⁾、南に東橋遺跡⁽⁴⁰⁾、西に平田キタガワ遺跡⁽⁴¹⁾が位置する。また、南西には飛鳥外郭施設の佐田遺跡群⁽⁴²⁾が存在する。藤原地域では前段階の大官大寺周辺から藤原京城全域にひろがると同時に北を意識する建物群が建並ぶ。おそらくこれらの建物群が次段階の条坊に伴う建物群へとつながるものと思われる。

第4期になると磐余・飛鳥・藤原地域の3地域に分布する。ただし、磐余地域では脇本遺跡のみしか確認されていない。脇本遺跡(III期)では正方位にのる掘立柱建物と柵列が確認されており大規模な邸宅が推測されている。この時期の中心は飛鳥地域にあり飛鳥京跡上層遺構が飛鳥浄御原宮に推定されている。また稲淵宮殿遺跡・嶋宮・石神遺跡(B期)など官衙遺跡が集中している。また、飛鳥南部の平田にはクルマゴエ遺跡⁽⁴³⁾・下ツ道の西に佐田遺跡群が立地している。この段階において最も注目されることは藤原地域にて条坊が設定されることである。横大路・山田道・下ツ道・中ツ道に囲まれた範囲(新城)にまず条坊が計画され実施される。集落の分布範囲もほぼこの中に納まる。とくに藤原宮域に集中するのは宮内先行条坊など比較的の第5期⁽⁴⁴⁾と識別しやすいことによる。第4期の末にはさらに北・東・西に条坊計画が広がる。四条遺跡⁽⁴⁵⁾の発見はその先がけとなるものであろう。

第5期になると集落は阿部・飛鳥・大藤原地域に分布する。この時期は新城を拡張した新益京の条坊が完成する段階である。飛鳥北方の広大な地域に平城京に匹敵する人工都市が浮かび上がるのである。集落はこの新益京内全域に分布する。これに対して飛鳥地域ではすでに飛鳥京跡も廃絶し、寺院を除くと極めて限られた遺跡しか存在しない。石神遺跡(C期)では前段階の遺構をすべて廃して新たな構造となる。飛鳥南西の出入口である下ツ道の両側には佐田遺跡群と上ノ山遺跡が位置している。一方、阿部地域では上之宮遺跡・吉備遺跡⁽⁴⁶⁾・吉備池遺跡⁽⁴⁷⁾がある。

このように6世紀後半から7世紀末までの飛鳥を中心とする周辺地域の集落の分布をみてきた。これはとりもなおさず飛鳥地域の開発状況を示すものである。ここでもう一度飛鳥地域の開発に

ついで都市の成立という点から見てみよう。第0期には磐余・阿部地域と飛鳥・藤原地域に分布するが飛鳥・藤原地域の遺跡は単発的な遺跡が多く、竪穴住居の存在など都市的景観はまだ持っていない。この時期の中心は確認された遺跡は少ないが、文献史料からも知られるように磐余地域にある。続く第1期になると飛鳥周辺に遺跡が集中する傾向がある。藤原地域にも遺跡が確認されているが、明確な生活痕跡とはいえない。一方、磐余・阿部地域も遺跡の密度は高く、飛鳥と二極をなしている。第2期には磐余地域の遺跡は急激に減少し、飛鳥地域の遺跡が増加する。特に、北は大官大寺地域から南は嶋の地域までひろがっている。第3期には藤原地域にまで開発が飛翼的に広がると同時にそれまで自由な方向を向いていた建物方位が、北を意識するようになり。第4期は最大の画期ともいべき時期で、藤原地域に前段階の建物群⁽⁴⁸⁾を基本として条坊が施行される。そして、第5期には新城を拡張した新益京が完成し、飛鳥地域の遺跡は減少する。

ここでもう一点、古道の年代について近年の調査から検討しておきたい。飛鳥周辺の古道には横大路・上ツ道・中ツ道・下ツ道・山田道が存在する。これらの中で発掘調査で検出されているのは、横大路⁽⁴⁹⁾・中ツ道⁽⁵⁰⁾・下ツ道⁽⁵¹⁾・山田道⁽⁵²⁾である。これらの大半は藤原京・大藤原京関係の条坊遺構と形態・時期にかわりなく、藤原京関係の遺構としての理解でも問題はない。この中で山田道の北側溝と考えられる遺構が検出されている。この調査では推定山田道路面に7世紀前半の掘立柱建物・柵列が同時に検出されており、推定北側溝は7世紀後半に掘削されていたことになる。また、藤原宮内西方官衙⁽⁵³⁾や右京十條四坊⁽⁵⁴⁾の調査で検出された7世紀前半の建物は30～45°西に傾き、特に右京十條四坊の調査地の西250mには下ツ道が位置することとなり、下ツ道の設置・整備年代を7世紀初頭とすると同時期に方位の異なる遺構群が存在することになる。ここでさらに注目されることは先にも記したように第3期になるとそれまでの自由な方位をさしていた遺構群がこの段階に北を意識するようになることである。これらのことから飛鳥周辺の古道の整備時期（真直線古道になるの）は第3期の7世紀中頃を想定することも可能であろう⁽⁵⁵⁾。

c、飛鳥地域の寺院

天武9年の「京内24寺」に関してはすでに「倭京」の範囲を示す史料とはなり得ないことは記してきた。ここでは飛鳥地域周辺の寺院の分布と画期、そして宮・京との関係についても⁽⁵⁶⁾検討を行いたい。

第0期には寺院は確認されていない。寺院造営の前段階にあたる時期である。ただし文献には大野丘北塔⁽⁵⁷⁾や、石川精舎⁽⁵⁸⁾・向原の家などの寺が記されており仏像が祭られていたとしている。しかし、これらは邸宅の一部を改造したり、一面に仏殿を建てるものがほとんどであり、七堂伽藍を備えたものではない。本格的な寺院は第1期の飛鳥寺まで待たなければならない。

第1期には飛鳥寺・豊浦寺・坂田寺・和田麿寺・奥山久米寺・定林寺・松隈寺が建立される。その分布を見ると飛鳥中心部と南部の丘陵地帯にひろがるのがわかる。飛鳥寺⁽⁵⁹⁾は発掘調査によって一塔三金堂の伽藍が検出され、初期寺院の一端が明らかになった。この飛鳥寺の立地する場所は北から飛鳥盆地へ入る入口部分に位置し、なおかつ比較的広大な平坦地を確保できる一等

地である。この時期の寺院は鞍作氏の坂田寺、桧隈氏の桧隈寺など渡米系氏族と有力豪族の寺院⁽⁶⁰⁾が大方を占め、その本願地に建立する。特に、南部丘陵地帯に坂田寺・定林寺・桧隈寺が位置するのはそのためである。

第2期になると日向寺・軽寺・田中麿寺・大窪寺・木之本麿寺・呉原寺・山田寺・安倍寺がこの時期にあたる。前段階に比べて山田道沿いと山田道以北に広がる。この段階ではじめて官寺が創出される。木之本麿寺が官寺である百済大寺の可能性が高い⁽⁶¹⁾と考えられているが、遺構はまだ確認されておらず、型押忍冬文軒平瓦が周辺で発見されている⁽⁶²⁾。また、文献⁽⁶³⁾によると百済大寺と隣接して百済大宮が造営されたと記している。つまり宮室と官寺の関係がこの段階に成立する。

第3期には橘寺・川原寺・雷麿寺・浦坊麿寺・丈六南遺跡・大井寺がある。この段階では山田道に沿って寺院が建立され、飛鳥周辺ではかなり多くの寺が密集する状況にある。また、この段階には第2期同様に官寺である川原寺⁽⁶⁴⁾と宮殿である後岡本宮（飛鳥京跡上層内郭）が並列する。ただし、文献によれば「京内諸寺」という表現があり、宮と寺の関係から次段階の都と寺院の関係への過渡的な時期にあたると思われる。

第4期には膳夫寺・本薬師寺・久米寺・興善寺がある。この段階は新城（藤原）地域に条坊が設定される時期であり、官寺である本薬師寺⁽⁶⁵⁾は重要な意味をもつ。本薬師寺の造営は新城条坊よりも先行するにもかかわらず、その伽藍は条坊にほぼ一致する。このことは発掘調査によっても確認されている。つまり、前段階までの宮と寺院の関係がこの段階で都城と寺院の関係として成立したことになる。また、発掘調査では桧隈寺⁽⁶⁶⁾と和田麿寺⁽⁶⁷⁾はこの時期の造営寺院しか確認されておらず、第1期の創建寺院は確認できない。これはこの段階で新たに再建したか、または整備を行ったことを意味するのかもしれない。京との関係で重要である。

第5期には大官大寺・八木麿寺・醍醐麿寺・岡寺の4寺院がこの段階にあたる。大官大寺は持統朝の官寺である。発掘調査により未だ造営途中で焼失したことが明らかとなった⁽⁶⁸⁾。このほかにも藤原官式の瓦が坂田寺・定林寺・橘寺・桧隈寺・紀寺・本薬師寺などから出土している⁽⁶⁹⁾このことからこの時期に整備されたものと考えられる。

このように飛鳥地域の寺院をみてきた。ここでまとめてみると、第0期は寺院造営前段階であり、本格的な七堂伽藍を備えた寺院は、続く第1期の飛鳥寺によって飛鳥の寺院史がはじまる。その範囲は飛鳥中心部と南部丘陵地域に渡来系氏族や有力豪族によって建立される。そして、第2期には官寺が創出され山田道以北に分布する。この段階は宮と寺院の関係の成立でもある。第3期の過渡期を経て、第4期になると「新城」条坊に規制された寺院が出現し、都城と寺院の関係となる。

d、飛鳥地域の墳墓

次に墳墓との関係でみてみよう。養老喪葬令には「凡皇都及道路側近、並不得埋葬」とある。この条文の内容がはたして7世紀代にまで遡るかが問題となる。しかし、藤原京造営に際して墳墓の改葬の記事⁽⁷⁰⁾があることや、推古朝の墓制改革・大化の薄葬令の存在が推定されていること

から、ここでもこれらとの関係に留意しながら墳墓の分布をみていきたい⁽⁷¹⁾。

第0期の墳墓は阿倍丘陵・藤原・飛鳥東南・飛鳥西南地域に分布する。

阿倍丘陵地域にはコロコロ山古墳・谷首古墳・文殊院東古墳・安倍山ST5・6号墳がある。コロコロ山古墳⁽⁷²⁾は一辺30mの方墳で、全長11mの石室を持つ横穴式石室である。谷首古墳は墳丘規模南北41m・東西38mの方墳の横穴式石室である。石室は全長13.8mで巨石をつみあげたものである。文殊院東古墳は文殊院境内に位置し、西100mには文殊院西古墳が存在する。墳形は不明であるが、10m程度の円墳とおもわれる。羨道の一部を破壊されており、石室規模は不明であるが玄室長4.8mで自然石を使用した横穴式石室である。安倍山古墳群⁽⁷³⁾は安倍山に位置する土壙墓群である。このうちST5・6号墳がこの段階にあたる。

藤原地域には日高山W1号墳⁽⁷⁴⁾のみが存在する。同墳は日高山の西斜面に掘られた横穴で玄室長2.9m・幅1.5mの規模である。また、この古墳で注目すべきことは、藤原京造営に際して改葬がなされており、都城の造営と古墳の関係を端的に示すものと考えられる。

飛鳥東南地域には石舞台下層1～7号墳・上居49号墳・都塚古墳がある。石舞台下層1～7号墳は次段階の石舞台古墳の造営に際して破壊された古墳群⁽⁷⁵⁾である。ほとんどが10m程度の円墳で横穴式石室である。細川谷古墳群の中の最も西に位置する支群と理解できよう。上居49号墳も細川谷古墳群の中に位置する巨石を用いた横穴式石室である。冬野川を挟んで400mのところに都塚古墳がある。墳形は方墳の可能性があり、全長12.2mの石室を持つ。

飛鳥西南地域には佐田遺跡群の中に位置する小谷遺跡と平田の梅山古墳がある。小谷遺跡⁽⁷⁶⁾では9基の古墳が確認されているが、これらの古墳群はこの段階から築造が開始される。方形または円形の墳丘を持ち木棺直葬である。梅山古墳は全長138mの前方後円墳である。

続く第1期の墳墓は阿倍丘陵・飛鳥東南・飛鳥西南地域に分布する。

阿倍丘陵地域には艸墓古墳・能登谷1号墳・秋殿東古墳・コロコロ山東小石室・メスリ山西土壙墓群・安倍山ST1号墳・エンドウ山1号墳が存在する。艸墓古墳は南北24m・東西20mの方墳で石材間に漆喰を塗りこんだ切り石を使用した横穴式石室である。秋殿東古墳は秋殿南古墳の東の丘陵に位置する10mの円墳で石室は自然石を使用した横穴式石室である。コロコロ山東小石室はコロコロ山古墳の墳丘東南隅にもうけられた小形の横穴式石室である。この段階の末から次段階のはじめにかけての築造と考えられる。メスリ山西隣土壙墓群⁽⁷⁷⁾は4基確認されている。この土壙墓群はこの段階から築造が始まり第3期まで続く。安倍山ST1号墳は木棺直葬である。エンドウ山1号墳は径8mの小規模な円墳で、全長4.3mの切り石の横穴式石室である。

飛鳥東南地域には石舞台古墳をはじめ打上古墳・塚本古墳の3基が存在する。石舞台古墳⁽⁷⁸⁾は前段階の下層古墳群を破壊し築造したもので一辺51mの方墳である。巨石を用いた最大級の横穴式石室をもち、蘇我馬子桃原墓の可能性が指摘されている。打上古墳は径20mの円墳で大形の横穴式石室を持つ。塚本古墳は一辺28mの墳丘を持つ方墳で、くりぬき式家形石室の横穴式石室である。

一方、飛鳥西南地域には前段階に引き続き小谷12号墳をはじめ数基の古墳が存在すると思われる。また、この段階に見瀬丸山古墳では追葬⁽⁷⁹⁾がなされる。

第2期の墳墓は阿倍丘陵・藤原・飛鳥西南地域の3地域に分布する。

阿倍丘陵地域には文殊院西古墳・秋殿南古墳・舞谷古墳群・メスリ山西隣土壙墓群・安倍山ST2号墳が存在する。文殊院西古墳は一辺25mの墳丘を持つと考えられている方墳である。石室は全長12.5mで花崗岩切石技法を用いる。秋殿南古墳は丘陵南斜面に作られた一辺21mの方墳である。舞谷古墳群⁽⁶⁰⁾は5基からなる方形の磚槨墳である。石郭は一墳三櫓で各墳ともほぼ同じ形態である。メスリ山西隣土壙墓群・安倍山ST2号墳が前段階に続きこの時期にも築造される。中山古墳群のうち2号墳がこの時期にあたる。この古墳は径18mの円墳で横穴式石室の埋葬施設をもつ。

藤原地域には日高山E1～2・W2～4号横穴が存在する。これらは日高山丘陵の東・西斜面に築造されており、すべて藤原京の造営によって改葬されている。

飛鳥西南地域には佐田遺跡群の群集墳のあとをうけ小谷5号墳が築造される。その占地は丘陵の南斜面に位置し、コの字形の小規模な谷地形に築造される点、いわゆる終末期古墳と類似する。また、下ツ道の西には一辺55mの方墳の岩屋山古墳が築造される。全長16.7mの石室は丁寧に加工した切石をもちい、目地には漆喰が確認される。

第3期の墳墓は阿倍丘陵・飛鳥西南地域の2地域に分布する。

阿倍丘陵地域には前段階の中山2号墳に隣接して中山1号墳が築造される。1号墳は周濠のめぐる径16mの円墳で横穴式石室の埋葬施設をもつ。メスリ山西隣土壙墓群はこの段階で築造を終える。

飛鳥西南地域には菖蒲池古墳・鬼俎厠古墳・牽牛子塚古墳・小谷古墳・久米ジガミ子遺跡が存在する。菖蒲池古墳は削平が著しく墳丘は不明だが、横穴式石室である。石棺は内面に黒漆を塗る家形石棺を2つ安置する。鬼俎厠古墳は墳丘規模・形態は不明であるが花崗岩を加工した底・蓋・扉石を組合わせた石棺式石室である。小谷古墳も岩屋山古墳同様に一辺35mの方墳で切石の横穴式石室を持つ。牽牛子塚古墳⁽⁶¹⁾は外護列石をもつ二段築成の八角墳である。凝灰石のくりぬき式石棺式石室で中に間仕切りを作りだし2室をもうける。夾紵棺・金銅金具・ガラス玉などの出土があり、斉明天皇陵の可能性が高い。久米ジガミ子遺跡⁽⁶²⁾はこの段階からはじまる遺跡で炭化物と須恵器のはいった土坑が検出され、火葬墓と考えられている。

第4期の墳墓は阿倍丘陵・飛鳥西南地域の2地域に分布する。

阿倍丘陵地域には前段階から引き続き築造されてきた中山古墳群のうち中山3号墳が築造される。同墳は完全に削平されているため規模・形態は不明であるが、横穴式石室であることは判明した。この古墳をもって阿倍丘陵地域での本格的な古墳築造は終了する。

飛鳥西南地域には天武持統陵・東明神古墳・久米ジガミ子遺跡がこの段階にあたる。

天武持統陵は新益京（藤原京）の中軸線南方に位置す八角形墳である『阿不幾乃山陵記』によると馬腦（大理石）の切石を用いた石棺式石室で内陣・外陣の2室からなる。中に夾紵棺と骨蔵器がある。東明神古墳⁽⁶³⁾は長方体の磚をつみあげて構築した石郭構造をもつ。草壁皇子墓の有力候補である。久米ジガミ子遺跡の火葬墓は前段階に続き構築される。

第5期の墳墓は阿倍丘陵・飛鳥西南地域の2地域に分布する⁽⁶⁴⁾。

阿倍丘陵地域には中山古墳周辺において土壙墓10・土器棺墓1の11基の墓跡が検出されている。

またコロコロ山古墳ではこの段階で追葬がおこなわれている。

飛鳥西南地域では中尾山古墳・高松塚古墳・マルコ山古墳・松山古墳・亀虎古墳がある。

中尾山古墳⁽⁸⁵⁾は径29mの三段築成の八角墳である。墓室は火葬骨を納めたもので、文武陵の有力候補である。高松塚古墳は壁画の存在で有名な終末期の古墳であり、墳丘規模20～25mの円墳で凝灰岩切石を組合せた石棺式石室である。この石壁に漆喰を塗り壁画を描いている。マルコ山古墳⁽⁸⁶⁾は径15mの円墳で、高松塚古墳同様の石棺式石室を持つ。松山古墳は偶然発見された古墳で墳丘・石室形態は不明であるが伝聞記録によると切石をもちいた石室と考えられる。棺金具・海獣葡萄鏡などの副葬がある。亀虎古墳⁽⁸⁷⁾はファイバースコープによって壁画が確認されている。墓室構造は高松塚古墳と同様である。

飛鳥地域の墳墓の動向を追ってきたが、ここで墳墓の分布と構造からみた都市的空間をうかがっておきたい⁽⁸⁸⁾。

まず、墳墓の時期的な分布であるが、阿倍丘陵地域では第0～5期までの墳墓が確認されはいるが、第0～2期までの墳墓の数に比べて第3・4期は土壙墓を除いては各1基ずつしか確認されていない。また、第5期になると土壙墓・追葬以外に墳墓の築造はなく、この地域の墳墓築造の中心的な時期は第0～2期であると考えられる。藤原地域では第0～2期に横穴が検出される他は墳墓の築造は確認されない。飛鳥東南地域では第0・1期の墳墓が検出されているが、それ以降は確認されていない。一方、飛鳥西南地域には第0～5期の墳墓が検出されている。しかし、第0～2期の墳墓は佐田遺跡群に集中しているのに対して、第3～5期の墳墓は西南地域の広範囲にひろがる。また、大王級の前方後円墳は第0期で築造を終える。

次に墳墓構造に目を向けると、第0～2期の墳墓は花崗岩自然石を用いた大形横穴式石室が多くなか、阿倍丘陵地域では第1期に切石を用いた横穴式石室の築造が始まり、さらに第2期には舞谷古墳群にみられるような、磚槨墳が出現する。一方、飛鳥西南地域の第3期には切石の横穴式石室のほかにくりぬき式の横口式石郭、そして凝灰岩横口式石室が出現する。この凝灰岩横口式石室は続く第4・5期に主流となる。

これらのことから都市的空間⁽⁸⁹⁾をみると、第1期までは飛鳥川上流の石舞台よりも北から藤原地域の日高山より南に限定される。第2期になると飛鳥東南地域の墳墓はなくなり、都市的空間はさらに南まで広がる可能性がある。そして、第3期になると日高山の墳墓もなくなり、より北方へと広がる。第4期末には条坊の設定により四条古墳の削平に代表されるように大藤原地域に都市的空間が現れはじめる。また、墳墓構造からはそれまでの伝統的な横穴式石室から第3期に出現しはじめる横口式石郭は第4期以降の主流となり、第3期を過渡期とし、第4期を大きな画期ととらえることができよう。この傾向は、阿倍丘陵地域で飛鳥地域より一時期はやい第2期から終末期古墳構造の墳墓が出現すること、阿倍丘陵地域と飛鳥地域での墳墓の衰退関係から律令官人層の墓域が阿倍丘陵地域から飛鳥西南地域への大きな流れが考えられる。

e、飛鳥地域の土器

「土器が、或は一般に遺物が分化のメルクマールとなるのは、土器が文化の変転と相照応して

その様相を変じているからである。その変貌によって、推移する文化の一時一時的姿を造形せられた物として可視の形に捉へているからである」と記したのは西弘海氏⁽⁹⁰⁾である。7世紀の土器についてはすでに西氏の論考に記されている。ここでは西氏の論考に導かれながら6世紀後半から7世紀までの土器の移り変わりを概観し、そのなかにある画期を抽出することから京の成立過程を浮かびあがらせたい。

第0期は、それまでの須恵器が自然な型式変化をとげてきた流れの中にある。杯Hはこの時期には法量の縮小化・粗雑化がすすむ時期である。しかし、これに続く第1期になると須恵器・土師器共に大きな変化がみられる。

第1期の須恵器は前段階の杯Hの蓋と身の逆転がおこる杯Gが出現する。またこの蓋には宝珠ツマミがつく。このほかに台付椀・鉢も出現する。しかし、これらの杯G・台付椀・鉢の全体に占める割合は少なく、主体はそれまでの杯Hである。一方、土師器は精製された粘土を使い、器外面をヘラミガキし、内面に暗文をほどこす杯C・皿・鉢が出現する。しかし、これも量的には少なくそれまでの無文の土師器がかなりを占める。

第2期は前段階に出現した土器様式が発展していく段階である。須恵器は杯Gが杯Hとの割合が半数ちかくになる。また、法量も最も小さくなる。土師器では無文の土器が衰退し、主体が杯C・皿・鉢に占められる。そしてこの段階に杯Aが出現する。杯Cは器高の縮小と共にヘラミガキの粗略化がある。

第3期の須恵器では杯Hが消滅する。また台付椀の発展としての杯Bが出現すると同時に椀A・Bも出現する。土師器では高杯のように型式変化をとげつつあるものもあり、過渡期的様相を示している。

第4期の須恵器ではカエリのない杯Bが出現する。また、須恵器と土師器の全般的に法量による器種数の増加がみられると共に高盤・大盤をはじめ大形の器種も出現する。

第5期は第4期に成立した土器様式の完成期である。須恵器では第4期に出現したカエリのない杯Bが主体となり、カエリのある杯は消滅する。土師器での変化は少ないが、器高の縮小と口径の拡大がわずかにみられる。

以上が6世紀後半から7世紀の土器の変化の内容である。西氏によると第1期には佐波理椀(金属製容器)の直接的な模範が須恵器と土師器の新たな器種の出現をうながし、その要因として仏教の受容が考えられ仏器としての性格が大きいとされる。続く第2期の法量の縮小は当時の群集墳の衰退に現われた支配体制再編の動きと、それに伴う政治的混乱に起因するとする。第3期は前段階の混乱期からの一応の終止符が打たれた段階とし、また、仏器の一種から食器へと変化する時期である。そして、第4期の多様な器種分化と法量の規格制は律令官僚制の整備と大量の官人層の出現を前提としていると考えられ、「律令的土器様式」の成立⁽⁹¹⁾である。

ここに第1期と第4期に大きな2つの画期をみることができる。このうち第4期は明らかに京としての都市の存在が背景にあり、その傾向は第3期を過渡期としてとらえることも可能である。第1期については仏器としての性格が大きいと考えられているが、ここにも何らかの都市像を背後に想定することもできるのではなからうか。この画期を仏教導入をきっかけに、磯城・磐余か

ら飛鳥への遷都と新たな政治体制への変換としてとらえるならば、ある意味で第1期の画期を宮都の成立・再編と理解できよう

4. 倭京の検討

これまで考古学的な遺跡・遺物から倭京の検討をおこなってきた。ここでは文献（日本書紀）にみえる「京」についての再検討をおこない、さらに先に考察した遺跡・遺物との関係をいかに理解するかについて考えたい。

まず、「倭京」の名称であるが、「倭京」の呼称は白雉4・5年・天智6年・天武元年5月・6月・7月・9月の7ヶ所に記載されている。これらの記事は難波宮・近江京そして壬申の乱の記事であり、すべて難波京あるいは近江京との対比に関する内容である。このことから「倭京」と称する名称が当時使用されていたかは疑問である。しかし、この他にも天武元年7月には「古京」・斉明5年7月の「京内諸寺」などの記事からもわかるように、当時の飛鳥周辺に「京」という認識が存在していたと理解してよいであろう。この「京」を指す名称は今となっては知るすべはないが、「倭京」という表現が唯一飛鳥周辺の京を記す名称である。それ故、本稿では飛鳥周辺の京を「倭京」と称しておきたい。

つづいて「京」の範囲を示す史料の初出をみてみよう。斉明5年7月「群臣に詔して、京内諸寺に盂蘭盆経を勧講かしめて、七世の父母を報しいむ」。この記事が「京」を一定の範囲を持つ空間ととらえることのできる最初の記事である。一方、行政上の「京」を示すものとしては天武5年9月「王卿を京及び畿内に遣して、人別の兵を校へしむ」あるいは天武14年3月「京職大夫直大参許勢朝臣辛禰努卒りぬ」がある。これらから知られるように、「京」は7世紀後半の斉明朝・天武朝にはすでに認識・成立していたことが読取れる。これ以前の大化2年の改新の詔にも行政上の「京」を示す記事が存在するが、この記事の信頼性は学会でも問題とされている。

では7世紀後半には存在していたと思われる「倭京」の範囲はいかなるものであったのであろうか。ここに「倭京」の範囲を考えるための史料が3点ある。天武元年9月、天武元年7月の壬申の乱戦闘の記事、そして天武9年5月の「京内24寺」の記事である。このうち天武9年5月の「京内24寺」に関してはすでに記したように必ずしも京の範囲を推定する材料にはなり得ない。天武元年9月「倭京に詣りて、嶋宮に御す」の記事は大海人皇子が近江京を脱して吉野に向かう途中に倭京に立寄る内容であるが、ここで嶋宮が倭京の内にあると理解できるのである。つまりこの時期の倭京は嶋宮を含む地域であることがわかる。つづく天武元年7月の「是に、果安、追ひて八口に至りて、登りて京を視るに、巷毎に楯を堅つ」からは八口が京を展望できる高い場所であることが推測され、中ツ道に沿う地域で京を展望できる高い場所は香久山であると考えられており、倭京は香久山から見わたせる地域、つまり香久山の南・西地域である。

このように7世紀後半段階の「倭京」の範囲は飛鳥・藤原地域と漠然とではあるが想定されよう。そこで「倭京」と「藤原京（新城・新益京）」との関係が次に問題となる。この関係をみるためには、文献の記載が「倭京」と「藤原京」のどちらに属するものかを識別する必要がある。そこで新城の計画がたてられる天武5年から藤原遷都の持統8年までのなかで「藤原京」「新城」「新

益京」と記される記事に注目すると天武11年3月「新城に遣す」・「新城に幸す」、持統4年10月「藤原の宮地を観す」などのように「遣す・幸す・観す」の表現と附随する例が多い。「幸す」とは天皇がお出かけになるの意味であり、造営途中の新城・新益京を視察に行くことになる。これに対して「倭京」の記事では「巡行」という表現となり京内を見て回ることになる。このように文章表現から「倭京」と「藤原京」のどちらに属する記事であるかが識別できると同時に「新城」が「倭京」の外に位置することが予想される。特に、天武11年3月「小紫三野王及び宮内官大夫等に命じて、新城に遣して、その地形を見しむ。仍りて都つくらむとす」からも「新城」が「倭京」の範囲外・離れた所にあると考えられる。しかし、天武13年3月には「天皇、京師に巡行きたまひて、宮室の地を定めたまふ」という記事があり、「巡行」の表現から見て、「京師」は「倭京」と考えられ、倭京内を巡行し、宮室の場所を決定したこととなる。この場合、藤原宮は「倭京」の内に位置することとなり先に記した内容とは相反すると受け取れよう。そこで先に記した「新城」が「倭京」の範囲外にあるとの理解を空間的に範囲外にあるのではなく「倭京」の内だが「新城」としての条坊を設定した特別な地域であるとの理解も可能であろう。

ではこれらの文献記事と前章での考察結果とはいかに符号するであろうか。「倭京」の成立時期について文献では斉明朝には成立していると考えられるが、遺跡では第3期には都市的空間がみられることと対応している。範囲としては文献・遺跡共にこの段階では飛鳥・藤原地域の範囲が考えられる。問題となるのは遺跡の第1～2期である。文献史料からは7世紀前半に京の存在を示す明確な記事はないが、第1～2期の都市的様相はこの段階からみられはじめると考えられる。その範囲は第3期にくらべて非常に狭く、この段階に「京」が成立したと理解するのは現状では可能性を指摘するにとどめておく。

5. まとめにかえて～今後の課題と展望

新益京（藤原京）の造営以前に存在したといわれる「倭京」。この「倭京」の実態にせまるため、本稿では飛鳥地域における都市的空間の成立過程を探ることとした。その方法としては6世紀後半から7世紀の遺跡（集落・寺院・墳墓・土器）の動向と文献史料との検討から、第1期に飛鳥寺周辺における集落の集中・寺院の創設・前方後円墳の消滅・金属器指向の土器の出現など最初の画期がある。つづいて第3期には集落範囲の拡大と共に北を意識した建物の出現・古官道の整備・終末期古墳の出現・文献による「京」の初出などの過渡期を経て、第4期の条坊の設定・都城と官寺・律令的土器様式の成立などの完成期に至る。つまり第3期には「倭京」と称する京が存在していたと考えられ、その範囲は飛鳥・藤原京地域と一致、これまで想定されていたような横大路・下ツ道・上ツ道に囲まれた広範囲の京は想定しがたい。京の成立時期に関しては、第1期からすでに都市的様相の徴候が現われはじめるが、都市的空間はその後、徐々に広がっていき第3期に至る。第1・2期は明確な「京」を示すとはいいがたいが、第3・4期の都市空間への基礎となることは確かであろう。

以上いくつかの検討を行ってきたが、本稿における分析にもなお問題点⁽⁹⁾は存在する。最後にその問題点を指摘し、今後の課題としたい。まず、本稿での分析の中心は時期別の遺跡分布の抽

出にある。分布図の性格上、発掘調査密度の問題がそこには存在する。今回の内容では飛鳥中心部と藤原宮域の調査密度が高い状況にある。今後の調査の進展により、この分布図の改訂を迫られることは十分に予想されるところである。また、時期区分についても、すでに記したように7世紀の土器編年が完成されているわけではなく、厳密な意味では時期区分に関しても問題はあろう。もうひとつ7世紀の都市空間を考察するに関しては「近江京」の問題が存在する。近江京は第3期に位置し、その意味で条坊の存在・京城の広がりなど微妙な時期にあたる。今後検討を加えていきたい。

このように未だ数々の問題点が存在するが、本稿では現状での「倭京」の理解についての私見の提示を行った。調査成果の蓄積を待って、再度検討したいと考えている。

本稿を作成するにあたり、在職中より御指導をいただいていた奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部の諸氏から様々な形で御教示をいただいた。特に、7世紀の土器の編年観・年代観については川越俊一・西口寿生氏から学ぶところが多く、飛鳥時代の寺院については花谷浩氏から御教示をいただいた。また、桜井市内の遺跡については桜井市文化財協会の清水眞一氏から御教示いただいた。ここに感謝の意を表したい。

註

- (1) 天智6年紀「皇太子、倭の京に幸す」など。
- (2) ここで言う「都市」とはいわゆる都市論に基づくものではなく、宮の周辺にひろがる官衙・官人の邸宅等を持つ景観をさす。今後「都市」の定義・概念に関しても検討を加える必要がある。
- (3) 岸俊男「飛鳥と方格地割」(『史林』53-4 1970年)
- (4) 岸俊男「倭京から平城京へ」(『国文学』27-5 1982年)
- (5) 秋山日出雄「藤原京と飛鳥京の京城考」(『地理』25-9 1980年)
- (6) 秋山日出雄「飛鳥京」(『講座考古地理学』2 1983年)
- (7) 木下正史「史藤原宮域の開発」(『文化財論叢』1983年)
- (8) 前田晴人「倭京の実態についての一試論」(『続日本紀研究』240・241 1985年)
- (9) この他に飛鳥地域に方格地割を復元する研究に網干善教「倭京(飛鳥)地割の復原」(『関西大学考古学研究紀要』3 1977年)、千田稔「歴史地理学における『復原』から『意味論』へ」(『地理の思想』1982年)がある。また、藤原宮内先行条坊を倭京の条坊とみる説に押部佳樹「飛鳥京・新益京」(『古代史論集』1988年)がある。これらの説に対しては井上和人「藤原京―新益京造営に関する諸問題」(『仏教芸術』154 1984年)・「飛鳥京城論の検証」(『考古学雑誌』71-2 1986年)で詳細に検討している。
- (10) ここでは飛鳥とその周辺地域(大藤原京城・阿部・磐余地域まで含めた)の広範囲を対象としている。
- (11) 新益京(藤原京)の造営と京城に関しては、天武5年に計画された新城(4古道に囲まれた

藤原京) 地域にまず条坊の設定を行い、その後東西北に拡張したものを新益京と理解している。その範囲は秋山説大藤原京と一致もしくはさらに北へ広がると考えている。これについては別稿にて論じたい。

- (12) 西弘海「西方官衙出土土器の編年と西方官衙についての考察」(『飛鳥・藤原宮発掘調査報告II』1978年)
- (13) 1992年9月19・20日のシンポジウム「古代の土器研究—律令的土器様式の東・西」にて安田龍太郎氏によって講演。
- (14) 林博通・葛野泰樹「滋賀県大津市穴太遺跡の瓦窯跡」(『考古学雑誌』64-1 1978年)
- (15) 奈良国立文化財研究所「山田寺第7次調査」(『飛鳥・藤原宮発掘調査概報20』1990年)
- (16) 奈良国立文化財研究所「坂田寺跡の調査」(『飛鳥・藤原宮発掘調査概報3』1973年)
- (17) 奈良国立文化財研究所「石神遺跡第4次調査」(『飛鳥・藤原宮発掘調査概報15』1985年)
- (18) 今回の分布図は時期の明確な遺構のみを、これまでの報告書から抽出した。遺物のみの出土は扱っていない。未報告のものが多いからである。
- (19) 磯城磐余の諸宮調査会「脇本遺跡1～7次調査概要」1984～1991年
- (20) 桜井市教育委員会「上之宮遺跡」(『阿部丘陵遺跡群』1989年)
- (21) 奈良国立文化財研究所『飛鳥寺発掘調査報告』1958年
- (22) 奈良国立文化財研究所「平古遺跡の調査」(『飛鳥・藤原宮発掘調査概報8』1991年)
- (23) 奈良国立文化財研究所「山田道第2・3次調査」(『飛鳥・藤原宮発掘調査概報21』1991年)
- (24) 奈良国立文化財研究所「藤原宮東方官衙地域の調査(第38・41・44次)」(『飛鳥・藤原宮発掘調査概報15』1985年)
- (25) 桜井市文化財協会「城島遺跡・アベマ地区発掘調査概要」(『桜井市内埋蔵文化財1989年度発掘調査報告書1』1990年)
- (26) 桜井市教育委員会「中山大型掘立柱建物」(『阿部丘陵遺跡群』1989年)
- (27) 奈良国立文化財研究所「山田寺第7次調査」(『飛鳥・藤原宮発掘調査概報20』1990年)
- (28) 奈良国立文化財研究所「飛鳥池遺跡の調査」(『飛鳥・藤原宮発掘調査概報22』1992年)
- (29) 橿原考古学研究所「檜前・上山遺跡発掘調査概報」(『奈良県遺跡調査概報1982年度』1983年)
- (30) 奈良国立文化財研究所「藤原宮第17次の調査」(『飛鳥・藤原宮発掘調査概報6』1976年)
- (31) 花谷浩氏の御教示による。
- (32) 桜井市文化財協会「城島遺跡田中地区発掘調査報告書」1992年)
- (33) 小澤毅「伝承板蓋宮跡の発掘と飛鳥の諸宮」(『橿原考古学研究所論集 第9』1988年)
- (34) 橿原考古学研究所「飛鳥京跡(島庄遺跡跡第20次)」(『奈良県遺跡調査概報1989年度』1990年)
- (35) 奈良国立文化財研究所「稲淵宮跡遺跡の調査」(『飛鳥・藤原宮発掘調査概報7』1977年)
- (36) 奈良国立文化財研究所「藤原京左京九条三坊の調査(耳成線2次)」(『飛鳥・藤原宮発掘調査概報12』1982年)・同「左京九条三坊の調査(37-4次)」(『飛鳥・藤原宮発掘調査概報14』1984年)・同「左京九条四坊の調査(第58-20次)」(『飛鳥・藤原宮発掘調査概報20』1990年)
- (37) 亀田博「飛鳥京跡小考」(『橿原考古学研究所論集 第6』1984年)

- (38) 榎原考古学研究所『飛鳥京跡Ⅰ・Ⅱ』1971・1980年など。
- (39) 明日香村教育委員会『酒船石北方遺跡現地説明会資料』1992年
- (40) 榎原考古学研究所『飛鳥京跡第100次調査(東備遺跡)』(『奈良県遺跡調査概報1983年度』1985年)
- (41) 亀田博「平田・キタガワ遺跡」(『大和を掘る—1986年度発掘調査概報7—』1987年)
- (42) 榎原考古学研究所「佐田遺跡群発掘調査概報」(『奈良県遺跡調査概報1983年度』1985年)
- (43) 榎原考古学研究所「平田・クルマゴエ遺跡発掘調査概報」(『奈良県遺跡調査概報1982年度』1984年)
- (44) 藤原宮域では先行条坊を廃して藤原宮の造営を行っていることから第4期と第5期の識別がわかりやすい。これに対して京内では第4期に引続き第5期まで条坊が存続するため、第4期の遺構との識別が不明確である。
- (45) 榎原考古学研究所「四条遺跡発掘調査概報」(『奈良県遺跡調査概報1987年度』1988年)
- (46) 桜井市教員委員会『桜井市吉備遺跡岡崎地区発掘調査概報』1986年、桜井市教育委員会『桜井市吉備遺跡法華堂地区発掘調査報告書』1987年、桜井市文化財協会『吉備遺跡松田地区発掘調査概要』1991年
- (47) 桜井市教員委員会『桜井市吉備 吉備池遺跡切田地区発掘調査報告書』1988年、桜井市文化財協会『吉池遺跡麦田地区発掘調査概要』1991年
- (48) 藤原宮域内の先行条坊の存在から、先行条坊とこれに伴う建物群(藤原宮報告ⅡのA-4期)が倭京に伴うものであるという見解があるが、私見ではA-1~3期の建物群が倭京に伴うものであり、A-4期の先行条坊は「新城(藤原京)」の条坊道路として設定されていると理解している。ただし、A-4期の建物群は前段階までの建物群を基本としており、この時期には藤原京は完成しておらず、その意味では倭京の範疇に含まれると考えている。
- (49) 奈良国立文化財研究所「右京一条二坊の調査(第64次)」(『飛鳥・藤原宮発掘調査概報22』1992年)
- (50) 榎原市教育委員会調査
- (51) 奈良国立文化財研究所「西京極大路(下ツ道)の調査(第58-5次)」(『飛鳥・藤原宮発掘調査概報19』1989年)
- (52) 奈良国立文化財研究所「山田道第1次調査」(『飛鳥・藤原宮発掘調査概報20』1991年)、同「山田道第2・3次調査」(『飛鳥宮発掘調査概報20』1991年)
- (53) 奈良国立文化財研究所「西方官衙地区の調査(第68次調査東区)」(『飛鳥・藤原宮発掘調査概報22』1992年)
- (54) 奈良国立文化財研究所「右京十条四坊の調査(第66-6次)」(『飛鳥・藤原宮発掘調査概報22』1992年)
- (55) 古道の設置年代については、主に岸氏の研究により推古紀21年の「又難波より京に至るまでに大道を置く」記事に求めて、7世紀初頭に直線古道として整備されたと考えられている。また、横大路に関しては和田萃氏によって、横大路周辺に欽明~崇峻天皇の宮室が比定されるこ

とから欽明朝頃に直線古道として整備されたとする 和田萃「横大路とその周辺」(『古代文化』18 1974年)。一方、河上邦彦氏は横大路沿いの遺跡が奈良時代前期に増加することからこの時期直前に成立、またこれ以前にも遺跡間を結ぶ「プレ横大路」を推定している 河上邦彦「横大路と考古学」(『環境文化』45 1980年)。このように古道の設定年代についても様々な意見があり、一致をみていない。また、中ツ道も飛鳥地域での存在は、考古学的に否定的な調査成果も報告されている。

私見では古道の(真直線になる)整備時期を7世紀中頃に推定しており、それ以前についてはほぼ同位置にやや蛇行しながら存在するのかもしれない。今後の課題である。

- (56) 飛鳥地域の寺院の創建時期については大脇潔「新益京の建設」(『古代の日本6 近畿II』1991年)に従う。また、本章ではこのほかに毛利光俊彦「古代の都城と寺院」(『古代の寺を考える』1991年)、橿原市千塚資料館『橿原の飛鳥・白鳳時代寺院』1992年を参照した。
- (57) 敏達紀14年2月15日条
- (58) 敏達紀13年条
- (59) 奈良国立文化財研究所「飛鳥寺発掘調査報告」1958年
- (60) 飛鳥資料館『渡来人の寺』1983年
- (61) 大脇潔「新益京の建設」(『古代の日本6 近畿II』1991年)、山崎信二「後期古墳と飛鳥白鳳寺院」(『文化財論叢』1983年)
- (62) 奈良国立文化財研究所「左京六条三坊の調査(第45・46次)」(『飛鳥・藤原宮発掘調査概報16』1986年)
- (63) 舒明11年7月条
- (64) 奈良国立文化財研究所「川原寺発掘調査報告」1960年
- (65) 奈良国立文化財研究所「薬師寺西南隅の調査」(『飛鳥・藤原宮発掘調査概報6』1976年)
- (66) 奈良国立文化財研究所「檜隈寺第3次調査」(『飛鳥・藤原宮発掘調査概報12』1982年)
- (67) 奈良国立文化財研究所「和田麿寺第2次調査」(『飛鳥・藤原宮発掘調査概報6』1976年)
- (68) 奈良国立文化財研究所「大宮大寺の調査」(『飛鳥・藤原宮発掘調査概報5』1975年)
- (69) 森郁夫『続・瓦と古代寺院』1991年
- (70) 持統7年2月「造京司衣縫王等に詔して、掘せる屍を収めしむ」
- (71) 本章では前園実知雄「大和における飛鳥時代の古墳の分布について」(『末永先生米壽記念獻呈集』1985年)を基に奈良県教育委員会「奈良県の主要古墳I・II」1971・1974年、猪熊兼勝「飛鳥時代墓室の系譜」(『研究論集』III 1976年)、飛鳥資料館『飛鳥時代の古墳』1981年、白石太一郎「畿内における古墳の終末」(『国立歴史民俗博物館研究報告』第1集 1982年)、桜井市教育委員会『桜井の横穴式石室』1987年を参照した。特に、終末期古墳からの土器の出土は極めて少なく、年代決定が難しい。ここでは前園論文に従う。
- (72) 桜井市教育委員会「コロコロ山古墳」(『阿部丘陵遺跡群』1989年)
- (73) 桜井市教育委員会『桜井市浅古・安倍山古墳群発掘調査報告書』1988年
- (74) 奈良国立文化財研究所「朱雀大路・左京七条一坊(日高山)の調査(45-2・9次)」(『飛鳥・

藤原宮発掘調査概報16』1986年)

- (75) 橿原考古学研究所「石舞台古墳」(『大和の考古学50年』1988年)
- (76) 橿原考古学研究所「佐田遺跡群発掘調査概報」(『奈良県遺跡調査概報1983年度』1985年)
- (77) 桜井市教育委員会『桜井市国史跡・メスリ山古墳西隣接地発掘調査報告書』1991年
- (78) 浜田耕作『大和島之庄石舞台の巨石古墳』1937年
- (79) 猪熊兼勝『見瀬丸山古墳と天皇陵』1992年
- (80) 橿原考古学研究所「磚槨墳研究会」(『大和の考古学50年』1988年)
- (81) 明日香村『史跡牽牛子塚古墳』1977年
- (82) 橿原考古学研究所「久米・ジガミ子遺跡発掘調査概報」(『奈良県遺跡調査概報1980年度』1982年)
- (83) 河上邦彦「東明神古墳の調査」(『季刊考古学』9 1984年)
- (84) 藤原京時代の墓域については飛鳥西南地域のほかに東方の初瀬谷沿いの丘陵地域と西方の葛城山東麓にも想定されている。金子裕之「平城京と葬地」(『文化財学報』第3集 1984年)
- (85) 明日香村教育委員会『史跡中尾山古墳環境整備事業報告書』1975年
- (86) 明日香村教育委員会『真弓マルコ山古墳』1978年
- (87) 飛鳥保存財団「特集キトラ古墳」(『明日香風』10 1984年)
- (88) 墓域と都との関係では河上邦彦「終末期古墳とその背景」(『古墳時代の研究』12 1992年)がある。
- (89) 推古天皇は大野岡上から科長大陵へ、舒明天皇は滑谷岡から押坂陵への改葬が記されているが、これについても都市(京)との関係で理解すべきかもしれない。
- (90) 西弘海『土器様式の成立とその背景』1986年
- (91) 奈良国立文化財研究所『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅲ』1980年
- (92) 本稿では飛鳥地域における都市空間を明らかにするために集落・寺院・墳墓・土器を概観したものである。そのため集落・寺院・墳墓・土器のそれぞれが持つ問題にまで踏込んだ検討は行っていない。

編集後記

今年の『紀要』は例年になく原稿の集まりが早かった。これも偏に各執筆者の日々の精進の賜物か。

今後も、洛陽の梓価を高めるような『紀要』であり続けたい。

編集者

平成5年3月 初版

平成6年3月 2刷

紀 要 第 6 号

編集・発行 財団法人 滋賀県文化財保護協会

大津市瀬田南大萱町1732-2

Tel(0775)48-9780・9781

印 刷 宮川印刷株式会社

大津市富士見台3番18号

Tel(0775)33-1241